

# 所報

富山県総合教育センター

No.148  
令和8年2月13日

富山市高田 525

E-mail : sogokyoiku@ed.pref.toyama.jp(代表)  
URL : <https://www.center.tym.ed.jp>



センター  
ウェブサイト



センター  
Instagram

## 卷頭言

## 自分を育てる事ができるのは自分のみ

副所長 盛本 茂

本年度の所報もいよいよ最終号を迎えました。この一年間、総合教育センターが企画・実施いたしました様々な研修に、多忙な業務の合間に縫って熱心にご参加ください、心より感謝申し上げます。皆様が真摯に学ばれるお姿は、私たちセンター職員にとって何よりの励みとなりました。

さて、突然ですがここで一つ質問します。「竹は、どのような場所で育つと思いますか?」きっと多くの方は日当たりがよく土に栄養がたっぷりあるところと答えると思います。もちろんそのような好条件の場所であれば竹は育ちます。しかし竹は日当たりが少なく土に栄養分があまりないなど条件の悪い場所でも力強く成長することができるそうです。では、条件の悪い場所で竹はどのように成長するのか。竹は自分の枝葉を枯らし地面に落とします。そして落とした枝葉を長い年月をかけて良質な腐葉土へと変え、自らが根を張る土壤を豊かにすることで竹は栄養を得て育っていく。つまり竹は「自分で自分で育てている」のです。この竹の姿は、教師の成長と重なるのではないかでしょうか。研修で得た知識や技能は、いわば成長のための「肥料」です。しかし、それらをどのように受け止め、咀嚼し、日々の教育実践という自らの土壤に還元していくのか。それは、先生方一人ひとりが主体的に向き合うことで初めて実を結びます。竹が自ら土を肥やし、自らを育むように、私たち教

師もまた「自分を育てる事ができるのは自分のみ」という気概を、常に持ち続けていかなければいけません。

研修は、未来への最も確かな投資です。そして、その投資を最大限に実らせることができるのは、他ならぬ私たち自身です。研修で得たわずかなヒントを、どうかご自身の教育実践の場や同僚との対話の中で、大きく花開かせてください。その一つひとつの積極的な実践が、子どもたちの豊かな学びとなり、ひいては学校教育全体の質を高めることに繋がると確信しています。

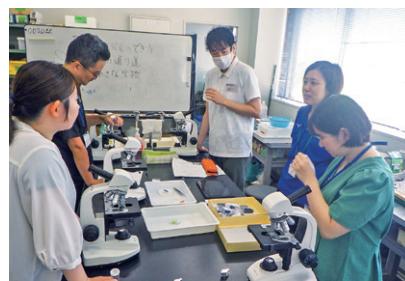
総合教育センターは、今後も皆様の「自らを育む力」を最大限にサポートできるよう、魅力的な研修を企画してまいります。来年度も皆様の積極的なご参加をお待ちしておりますとともに、益々のご活躍を心よりお祈り申し上げ、巻頭の言葉とさせていただきます。



## 各部の研修・事業風景より



新規採用教員研修会（栄養教諭）  
(共同調理場での現地研修)



理科教育講座（実験）小学校  
(「植物の養分と水の通り道」の観察実験)



教育相談訪問研修  
(「心理的安全と居心地のよい学校～日常の教師の関わりの視点から～」第3回射水市生徒指導協議会において)

## センター News その悩み、インスタに解決のヒントがあるかも！

先生方に役立つ情報を「総教セ公式 Instagram」で随时発信しています。ちょっと覗いてみませんか？



# 令和7年度 調査研究事業の概要

## 教育研修部

### 学んだことを生活や学習に活用する力の育成に関する調査研究 —算数科の授業を通して—（2年次）

令和6年度より教育研修部では「学んだことを生活や学習に活用する力の育成に関する調査研究」を進めています。昨年度は、研究協力校（県内小学校2校）において、第5学年の単元（「変わり方を調べよう」・「比べ方を考えよう」）の授業づくりで、「授業モデル」を提案することができました。「子供が身に付ける力（子供のゴールの姿）」を想定しながら単元構想を行い、単元の前後に同一の評価問題を実施することで、子供一人ひとりの変容を捉えることができました。この調査研究を通して、新たな課題に対して、既存の知識を活用して解決しようとする子供の主体的な姿が見られました。

\*詳しくは「[研究紀要（第43号）](#)」をお読みください。

今年度も（昨年度と同じ）研究協力校において、第6学年の単元（「分数の除法」・「円の面積」）の授業づくりを、富山大学教職大学院の院生及び研究協力校の先生方と一緒に進めました。特に「活用する力」の育成を明らかにするために「統合的・発展的に考えること」に着目し、「まとめ」と「振り返り」の充実を図りました。具体的には、数学的な見方・考え方を働かせた場面・内容を想起させながら「まとめ」を記述させたり、課題解決にどのような数学的な見方・考え方を用いたのか、新たな課題に出会ったときにどのように解決していくかに着目させながら「振り返り」を記述させたりしました。このときに大切なことは、教師の問い合わせであることも分かってきました。

今年度の調査研究については、「研究紀要（第44号）」にまとめ、富山県総合教育センターのウェブページにも掲載します。また、次年度以降は、この2年間で得られた「授業モデル」の知見をもとに、他の校種・教科における汎用性について、検証を進めていきたいと考えています。



授業後の協議の様子（研究協力校にて）

## 科学情報部

### 中学校理科における科学的に探究する学習に関する調査研究 一生徒が自ら探究する授業づくりを目指して—（2年次）

学習指導要領において探究の過程が一層重視される中、本調査研究では、中学校理科において生徒が主体的に問い合わせをもち、科学的に解決する力を育むことを目指した。そのために、「生徒が自ら科学的に探究する授業を実践するための教師の有効な手立て」を示し、授業実践を通してその効果を検証した。今年度は、課題意識を高めるための工夫において、手立ての汎用性を高め、見通しをもって課題解決に向かう工夫において、手立ての具体化を図った。また手立ての効果を高めるためのICTの活用を検討した。本調査研究で明らかになった成果は、主に以下の3点である。

#### 1. 課題意識を高めるための工夫

生徒が学習課題を自分事として捉えるには、導入段階での働きかけが重要であると考えた。既習知識とのズレ等を意図的に生じさせる「生徒の実態に合った思考を促す教材」の提示と、教師による「注目発問」・「着目発問」を組み合わせた。これらにより生まれた気付きや疑問を、対話を通じて共有することで、生徒は他者の視点に触れ、一人一人の課題意識を高めることができた。

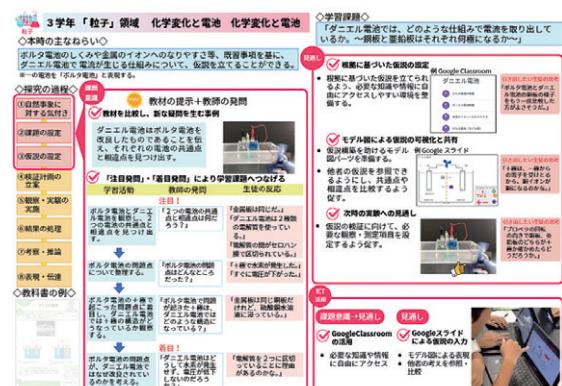
#### 2. 見通しをもって課題解決に向かうための工夫

生徒が自分で仮説を立て、検証計画を立案し観察・実験に臨むことができるようになるには、適切な環境づくりが必要であると考えた。生徒の実態に合わせて、思考するための材料を選択したり、互いの考えを検討したりする場を設けた。その環境下で仮説や検証計画を立てることにより、生徒は根拠を基に仮説を設定し、自ら条件を整理して検証計画を立案できるようになり、解決までの見通しをもつことができた。

#### 3. 生徒が科学的に探究するためのICTの活用

上記2つの手立ての効果を高めるものとして位置付けた。特に1人1台端末を用いて個々の思考を可視化し、共同編集機能等でリアルタイムに共有することで、他者の考えを取り入れた思考の修正・改善が容易になった。これにより、課題の設定から解決まで、円滑に進めることができた。

本調査研究では、これら3つの視点に基づく具体的な教師の手立てを「授業デザインシート」にまとめ提案した。このシートを参考に授業を設計することで、生徒が自ら探究する姿に繋がることを目指す。



今年度作成した授業デザインシート（「粒子」領域）

## 「定期相談はこうあるべき」に縛られていませんか？ —児童生徒理解の視点に立った定期相談につながる支援シートの提案—

日々の教育活動において、一人一人とじっくり向き合うことのできる「定期相談」は、児童生徒理解を深める極めて重要な機会です。しかし、現場の先生方からは「子供が心を開いてくれない」「本音が聞けない」といった声がしばしば聞かれます。

調査から明らかになったのは、教師が「悩みの把握」や「解決」を定期相談の目的とする一方で、子供たちは、この時間への大きな期待と同時に「先生に何を聞かれるのか」という強い緊張感も抱いているというギャップです。教師の目的と子供の複雑な心境との「ずれ」こそが、本来安心できるはずの場を、子供にとって心理的負担の大きいものにしていました。

この課題に対し、私たちは教師が自身の関わり方を省察し、児童生徒の視点に立つことを支える「定期相談サポートシート集」を開発しました。例えば子供の不安を和らげる事前説明のシートや教師自身の「定期相談はこうあるべき」といった思いをほぐすシート、子供が言葉に頼らず意思表示できる「指さし対話シート」等、全部で11種類の多角的な支援シートを揃えています。これらが、教師と子供が同じ場に安心して居合わせるための「媒介」として機能することを目指しました。

本研究の成果は、各学校でご活用いただけるよう、富山県総合教育センターのホームページ等での公開を予定しています。また、多忙な学校現場でも短時間かつ主体的に実践を深められるよう、15分程度で実施可能な「校内研修プラン」も併せて提案しています。本研究の成果が、定期相談での子供との温かな関わりを支える一助となれば幸いです。



## センター事業より

### 新たな世界に向けて

～外国語指導助手(ALT)の指導力等向上研修会～

(教育研修部)

11月12日(水)、13日(木)の2日間にわたり、外国語指導助手(ALT)の指導力等向上研修会が開催され、2日間で延べ149名が受講しました。この研修は、効果的な語学指導を行うために必要な知識と指導技術の習得を目指しています。経験年数2年目以上の再任用ALTが運営する分科会は、授業で使えるアイディア、職場での人間関係や異文化交流、日本での生活に役立つもの等テーマが多岐に渡り、この研修に向けてALT達は入念な準備を重ね、各々の分科会に臨んでいました。

この研修はJETプログラム参加ALTだけではなく、日本人外国語教員(JTL)も対象であり、外国語教育におけるスキルや経験を共有し、課題や諸問題について意見交換を行うことで、チームティーチングの質の向上を図ることをねらいとしています。研修は全て英語で行われましたが、事後アンケートでは「英語をたくさん聞くことができた」「他校のALTと交流することで視野が広がった」という意見もあり、オールイングリッシュの環境を、自らのスキルアップの機会としていた受講者もいました。

閉会式の全体講評の中で、AIを使った学習と人を相手にした対面での活動の関係についての言及がありました。授業づくりに「ヴァーチャルと現実」という軸が加わり、ALTと日本人教員の連携がより一層求められるものとなっていきます。



意見交換を行う受講者の様子



グループ活動の様子

#### 受講者の声(ALTとJTLより)



ALTとJTLがバランスよくグループ分けされていたので、授業での実践を共有する際、有益な情報交換ができた。



講義を聞いて、英語指導に関する基礎理論を学ぶことの重要性に気がついた。



授業の中で発生する問題やその解決策について考える機会があってよかったです。



生徒の実情に合った活動にするにはどうすればよいか、ワークショップを楽しみながらヒントを得ることができた。

# センター事業より

## 「理科の面白さを、体感で知る」

### ～生徒実習～

(科学情報部)

今回の実習を終えて実施した事後アンケートの結果は、5段階中満足度4.9という高い数値を記録しました。しかし、この数値以上に真に着目すべきは、実習中の理科室に満ち溢れていた、生徒たちがもつ学びの熱量そのものです。

各分野の具体的な取組を振り返ると、そこには知的好奇心に動かされた生徒たちの生き生きとした姿がありました。物理分野では、まだ学習していない内容であっても、工作と実験を組み合わせることで光の不思議な特性を直感的に捉え、自ら「理(ことわり)」を導き出していました。化学分野では、学校の理科室にはない専門的な分析機器を利用し、身近な水や飲料水に含まれる成分を探究しました。また地学分野においては、膨大な図鑑や文献からアノマライトの姿を紐解き、折り紙を使って精密な模型を完成させることで、数億年前の生命の営みを形態学的に解析する醍醐味を味わいました。そして生物分野では、解剖という生命の根源に迫る真摯な作業を通じ、構造の複雑さと生命の尊さを肌で感じ取ろうとする姿勢が大変印象的でした。

どの分野においても共通していたのは、教科書の記述を単なる文字情報として受け取るのではなく、自分の手で再現し、自力で検証しようとする極めて主体的な姿勢です。生

徒の感想からは「複雑な計算は難しくて苦労したけれど、正しい結果が出た時の喜びがそれ以上に大きかった」という声が多く寄せられました。壁に直面し、それを自らの思考で乗り越えた先にある「達成感」こそが、真の学びの1つであることを生徒自身が証明してくれたように感じます。

「なぜ?」と問い合わせ、仮説を立て、観察、実験で確かめる。こうした4分野を横断する多角的な学びは、個別の断片的な知識を繋ぎ合わせ、一つの「科学の目」へと統合させていきます。この実習で得た確かな手応えと感動が、生徒たちの未来を明るく照らす、知的好奇心の種となることを心から願っています。



地学実習



化学実習

## 科学実験で、見る・試す・つくるの 面白さを親子で味わう

(教育相談部)

11月26日に「親子deおもしろ科学実験」を行いました。科学実験や工作の面白さを味わったり、参加者同士、親子、スタッフとの交流をしたりしました。

蒸気で進む船の玩具を作る「ぽんぽん蒸気船」、浮き沈みするフックで底にあるリングを取り「浮沈子」、ペットボトルを加工して山彦のような響きを作り出す「音遊び」、磁石で砂鉄を動かし、絵を作って遊ぶ「磁石で遊ぼう」の4つの実験があり、親子で工作や実験で生じる現象を楽しみました。「サイエンスショー」では、ビニール袋で作った熱気球を飛ばす実演があり、熱気球が上昇するたびに大きな歓声が上がりいました。

参加者からは「理科の実験を親子で楽しみながらすることができてよかったです」「工作に夢中になった」等の感想が聞かれました。



サイエンスショー  
「熱気球」



「浮沈子」

## 研修動画コンテンツを校内研修で 積極的に活用しませんか?

(教育相談部)

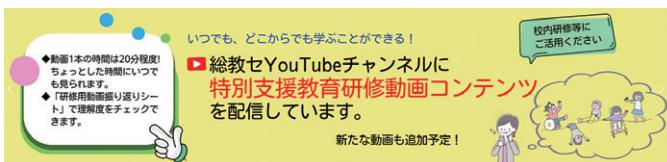
教育相談部特別支援教育担当では、令和4年度より富山県総合教育センターのYouTubeチャンネルに「特別支援教育に関する研修動画」を28タイトル挙げています。

今年度は夏季研修等に参加された方を対象にアンケートを取り、活用に関するご意見をいただきました(442件の回答)。その結果、70.4%の方から特別支援教育研修動画コンテンツを視聴したことがあると回答がありました。当センターでは、事前に動画を視聴の上受講する研修もありますが、それ以外に、「知りたいことが分かった」「短時間で見ることができ、手軽だった」と、自主的に視聴されている方も多くおられました。

また、中には、校内研修の際に、この動画を視聴し、概要欄に添付されている「振り返りシート」を活用しているというご意見もお聞きしています。振り返りシートは選択肢で気軽に解答しながら動画の内容を振り返ることができるので、終礼時等のミニ研修会等に活用しやすくなっています。

令和8年度も新しい動画をアップしていくので、ぜひご活用ください。

研修動画コンテンツは、富山県総合教育センターウェブページ(<https://center.tym.ed.jp/>)からアクセスできます。



## 随想1

# 私たちちは子どもたちに何を語るのか

学力向上アドバイザー 中川 邦章

最近、家のテレビでYouTubeを見ることが多くなった。外国人が日本での滞在を紹介する動画や観光客へのインタビューが面白い。ビール片手に眺めていると、日本という国について改めて考えさせられる。

「親切すぎる」「嫌な思いをしたことがない」という声に、少しうれしくなる。ごみの落ちていない道、子どもだけで登下校する光景。「こういうことを当然に前じゃなく」と驚きをもって語られている。

日本の食やファッションも好評だ。「何を食べてもおいしいなんて、本当にすごい」「人々はおしゃれで自分らしさを表現している」といったコメントに、感嘆と敬意が込められている。

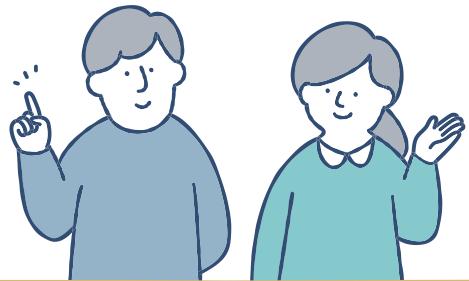
マナーや礼儀も、よく話題になる。「コンビニで水を一本買っただけなのに、『ありがとうございます』と笑顔で言われて感動した」と語る人もいた。そんな小さなやりとりこそが、日本の気風を形づくっているのかもしれない。

そして、教育にも関心が寄せられていた。「先生と生徒が対話しながら授業しているのが素敵」「こんな学校なら私は学校嫌いにならなかつたかも」。元教員として、思わず誇らしい気持ちになる。教室の空気の柔らかさや先生と子どもの信頼関係が、国境を越えて伝わっている。

ところが、地上波のニュース番組に切り替えると、急に心がざわつく。年々深刻さを増す不登校やいじめ、慢性的な教員不足と志願者の減少。人口が減り続ける状況や様々な業種に広がる労働力不足、そして公共交通機関の縮小。特殊詐欺や政治不信を招く報道も依然として後を絶たない。

外から見ると光って見える日本も、内側にいると陰につい目が向いてしまう。どちらが本当なのか。あるいは、どちらも真実であり、どちらも幻なのかもしれない…。

では、その中で私たちは子どもたちに何を語るのか。未来はまだ定まっていない。気付いた一人一人の手で少しずつ形を変えていくのだろう。そして教育に携わる私たち自身も、その未来を形づくる一人ではないだろうか。



## 随想2

# 「豊かな気付き」を得る研修

教育研修部長 野崎 悟

教育研修部では時代の変化に合わせて研修をアップデートするという考え方のもと、研修内容を見直してきました。

令和6年度においては、研修前に本日の研修内容が「富山県公立学校の教員等の資質向上のための指標」<sup>(1)</sup>に示された「資質能力」のどの項目に該当するのか、研修受講者に研修の「目標」を意識してもらうよう研修運営を工夫しました。また、研修終了後に「研修でどのようなことを学んだか」を、受講者間の情報交換の時間を利用して「振り返る」ようにしました。この効果として、当日の研修目的とその意味について明確に意識することができるようになりました。この情報交換の時間は令和6年度から設定しましたが、この研修運営の工夫が受講者に大変好評であったことから、令和7年度においても研修の「目標」に対する意識と研修後の「振り返り」を一層意識するような研修運営に努めてきたところです。

更に、令和7年度においては、「外国人児童生徒教育実践講座」を年4回の研修にし、第1回を4月に実施しました。また、特別支援学校勤務の中高採

用者には高等学校の若手教員研修「協力校研修1・2・3」を希望により受講できるようにし、年次研修や職務研修及び専門研修において受講者のニーズに合うように研修設計を見直してきました。

このように「研修運営を工夫」し、「研修の振り返りを意識」することにより、研修受講者自身の経験と研修の学びを関連付けることで、研修で学んだことが「自分事」として捉えられるとの考え方から、研修を通じて受講者が「豊かな気付き」を得ることができるよう支援していきたいと考えています。

これからも教育研修部は先生方に魅力ある研修を提供して、先生方が主体的に学び続けることができる仕組みと機会を保障することで、児童生徒にとって質の高い教育を提供する土台作りを担っていきたいと思っています。新たな気付きを促進する場として、引き続きご理解とご協力をお願いいたします。

<sup>(1)</sup> 「富山県公立学校の教員等の資質向上のための指標」(富山県教育委員会)

## 生成AIがもたらす「速さ」と「独創性」 -教育の未来を創る「奥義」とは-

科学情報部 研究主事 中嶋 裕也

さて、読者の皆様に突然ですが、下記の言葉が誰の言葉であり、「〇〇」には何が入るか分かりますか？「この〇〇の真の価値は、その『速さ』と『独創性』にある。わしが墨俣に一夜にして城を築いたように、この〇〇も人の何倍、何十倍もの速さで、求められた新しい『成果物』を築き上げるのじゃ。これがあれば、世の絵師や文筆家、職人たちは、より深く、より創造的なことに力を注ぐことができるようになるじゃろう。楽して儲けるのではなく、より良い世を創るために、まことの『奥義』じゃな！」

この文章は、生成AIの一つである「Gemini」に「豊臣秀吉」になりきってもらひ、「生成AI」について語らせたものです。つまり、「〇〇」には「生成AI」が入ります。時を超えて現代に蘇った秀吉が、その革新性を一瞬で見抜いているのはさすがです。

ChatGPT登場から約3年、生成AIは今や「頼れる相棒」となり、私たちの創造活動を根本から変えつつあります。

最新のGemini 3.0の性能は驚異的です。例えば「落ち物ゲーム」の作成を依頼すると、わずか数秒で動作するプログラムが完成します(図1)。スコア表示や特殊ブロックの追加も対話だけで容易です。



図1

また「Storybook」機能を使って、私が総合教育センターに着任しICTを習得するまでの物語を10ページの絵本として作させることもできました(図2)。これらの事例は、子供たちがコンテンツを「消費」する側から「創造」する側へ転換したことを象徴しています。

AIは創造の敷居を劇的に下げ、誰もがプログラマークリエーターになれる可能性を広げたのです。

しかし、進化のスピードは速く、情報はすぐに陳腐化します。「えさを待つひなどり」のような受動的姿勢ではいられません。教員自身が常に生きた情報を追い、吟味し、実践に取り入れる主体的・継続的な学びが不可欠です。

最後に、AI秀吉はこう問い合わせてきました。

「この天下無双の『生成AI』という道具、そなたはどう用いて、新しい世を創るつもりじゃ？」

AIを単に「楽をするため」ではなく、「より創造的な教育」を実現するために活用するという意志と倫理観が求められています。この「奥義」を子供たちの未来のためにどう活かすか。その舵取りは、あくまで人間に委ねられているのです。



図2

## ブラシを置いて見守る勇気

教育相談部 客員研究主事 濱野 恵美

近年、「カーリングペアレント」という言葉を耳にし、良く言い当てると思いました。プレイヤーは氷の上でストーンが滑りやすいよう、ブラシで進む先をゴシゴシと磨きます。その姿は、子どもの前にある不安や困難を、親が先回りして取り除こうとする姿と重なります。一見すると愛情深く、献身的な関わりにも見えますが、教育相談で日々出会う相談の中には、その善意が思いがけない影響を及ぼしている場面に出会うことも少なくありません。

相談室に来られる親の多くは、「子どものためを思って」進学先を選び、「失敗しないように」選択肢を絞り、「困らないように」次の行き先を決めてきたと話されます。その言葉の奥には、子どもを思う気持ちと同時に、先の見えない状況への不安を、少しでも早く落ち着かせたいという親自身の思いも感じられます。立ち止まり、迷い続ける時間は、親にとっても決して楽なものではないでしょう。

一方で、子ども本人は相談室に姿を見せず、担

当者が顔を合わせないまま話が進んでいくケースもあります。「何をしたいのかわからない」「どう動けばいいのかわからない」と言葉を失い、相談の場そのものから距離を取ってしまう子ども達もいます。親が丁寧に道を整えてきた結果、子どもが自分で立ち止まり、考え、選ぶ経験を重ねにくくなっているように感じられることがあります。

人は自分で選び、時には転びながら、少しづつ内側からの意欲を育てていくものです。転ばないように氷を磨き続けるのではなく、転んでも立ち上がれる力を信じて見守ること。その視点を変えることが、子どもが自分の足で動き出すための、支えや力になるのかもしれません。そして、その「信じて待つ」という姿勢こそが、親や周りの大人の難しさなのだろうなと、相談の場に立ち会うたびに、私は思います。

